

中国電影大観

フー トン
胡同の理髪師(剃頭匠 / The Old Barber)

2008(平成20)年2月7日鑑賞(東映試写室)

監督=ハスチョロー / 出演=チンクイ (本人) / 張耀興 (本人) / 王洪濤 / 王山 / 馬景竜 / 佟仲琪 / 由立平 / 宋戈 / 徐慧芷 (アニメプラネット配給 / 2006年中国映画 / 105分)

……2007年10月8日に北京の什刹海公園で見学した胡同の風景がスクリーンいっぱい！ 1913年生まれの理髪師チン爺さんは今なお現役だが、友人たちに次々とお迎えが来る中、自分も来るべき日の準備を……。今しか撮れない風景を、今しか撮れない実在の人物を主人公に描いた手法は実にお見事！ 都市問題と老人問題に切り込むヒントも満載だが、それはサラリと……。

美しい什刹海公園の風景が

この映画の主人公である、93歳でなお元気に現役で理髪業を営んでいるチン爺さん(チンクイ)が住むのは、北京の天安門の北西にある鐘楼・鼓楼周辺の胡同。鐘楼・鼓楼は前海、後海、西海のある什刹海公園にあり、ここに登れば周辺一帯を見下ろすことができる必見の観光スポット。また、ここを訪れた観光客には、人力車による胡同めぐりが人気。ちなみに、この映画にも少しだけこの観光客向けの人力車が登場するが、私は2007年10月8日にタププリと2時間以上かけてこの人力車による胡同めぐりを堪能した。

美しい前海、後海、西海の周りには近代的なレストランも多く、また有名人が所有する広大な四合院も多い。また、観光客向けに有料で見学させてくれる四合院もあるから、ここを訪れた時は是非その見学を。さらにこの映画の中に登場する京劇の名優梅蘭芳の広大な四合院もあるから、それにも注目を！

その他、この観光名所には観光スポットは多いが、他方で、チン爺さんのような庶

民が現実に生活している胡同もまだまだ多く、古き良き時代の北京の雰囲気がいっぱい……。そんな美しい什刹海公園とその周辺の胡同の風景に思わずうっとり……。

中国にも「都市再開発法」を！

2008年8月8日の北京オリンピック開催に向けた都市づくり（都市改造）は数年前から加速されていた。そして、それによって否応なく当局が建物の解体を命ずる「拆」の字がペンキで大きく書かれた建物が増えていた。また、2007年3月16日の物権法の制定、10月1日からの同法の施行はそれをさらに加速させたうえ、地方都市における土地収用騒動の原因となっている。中国は、2007年6月29日の「労働契約法」の制定と2008年1月1日からの施行を含めて近時法治国家に向けた法制度の整備を加速させているが、何せ政治体制が共産党一党独裁だから、何かと問題点が……？

私はまちづくりや都市計画をテーマに25年以上取り組み実践してきたが、ここで強調しておきたいのが、日本では田中角栄が1967～69年の間に近代都市法を確立させたこと。そして①都市計画法、②建築基準法、③都市再開発法という都市三法が制定され、これが「市街地再開発事業」に大きな役割を果たしたということだ。もちろん、その後時代の変遷に対応して何度も改正されてきたが、都市再開発法は「等価の原則」すなわち「従前権利と等価で従後の権利に置きかえられる」という原則は一貫している。

中国でも都市再開発の必要性は疑いないが、その場合に最も大切なことは、この

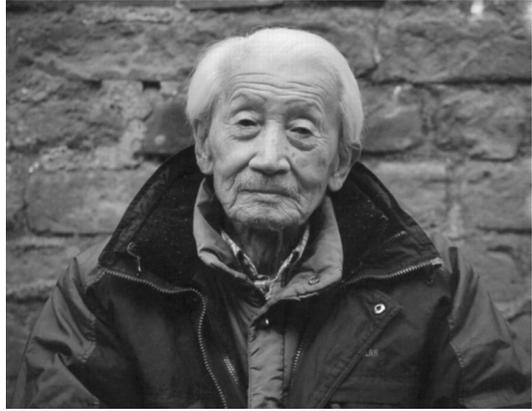


「等価の原則」を確立すること。この映画は93歳のチン爺さんに焦点をあてたものだから、再開発をめぐるそんな法律問題はサラリと流しているが、問題の根幹がそこにあることは明らか。したがって、私としては、まずその点をしっかりと確認し

ておきたいし、中国にも是非都市再開発法の制定を期待したいものだ。

🎬 次回は、必ずモツ料理店「爆肚張」へ！

私のシェンチャーハイ什刹海公園見学は、1回目の人力車によるフートン胡同巡りが終わると夕方5時頃だったから、ポチポチ前海周辺のレス



トランには灯がともり、営業を開始する頃だった。そんな中、いくつかのレストランの前を通ったが、ひょっとしてチン爺さんの友人であり、3代目オーナーであるチャン老人チャン・ヤオシン（張耀興）が経営するモツ料理店「爆肚張」の前も通ったかも……？

什刹海公園周辺のレストランでは焼肉屋の「焼肉季」が超有名だが、いろいろな料理を自分で選び、好きなものを好きなだけ食べるという珍しい方式の「九門小吃」も有名。そして私が2007年10月8日に北京の友人たち3人と一緒に夕食を食べたのがこの「九門小吃」。

近い将来訪れるであろう次回のシェンチャーハイ什刹海公園観光では、必ずモツ料理店「爆肚張」へ行かなくちゃ。もっともその時は、チャン老人の息子が4代目オーナーになっているかも……？

🎬 劇映画とドキュメンタリー映画の融合……？

この映画の主人公は、原題、英題、邦題のどれからもハッキリわかるとおり、1913年に北京シュンイ順義具で生まれ、12歳で北京に上京し、理髪師の見習いを始めたチン爺さんこと靖奎。この映画はそんな実在の人物靖奎を追うものだから、基本的にはドキュメンタリー映画……？

他方、この映画にはストーリー展開に重要な役割を果たす3人の、チン爺さんと同世代の老人たちが登場するが、モツ料理屋“爆肚張”の3代目店主のチャン老人もプロの俳優ではなく本人だ。しかし、寝たきり老人のミー老人ワン・シャン（王山）と、頑として息子の家への引き取りを拒否しているチャオ老人ワン・ホンタオ（王洪涛）は、多分プロの俳優。

チン爺さんから散髪の出張サービスを受けたミー老人はホントに気持ちよさそうだったが、1人で寝たきり生活を続けていた彼は、2度目にチン爺さんが訪ねてみると孤独死していたから、この映画はドキュメンタリー映画ではなく劇映画……？

また、こちらもチン爺さんの出張サービスを受けて大満足のチャオ老人は、「息子夫婦の家には絶対行かない！」「この家は世話になっている隣人に譲る！これから遺言をしに行く！」と宣言していたのに、2度目にチン爺さんが訪ねてみると、家にはカギがかかったまま。そして隣人の女性（徐慧芷^{シュ・フェージュ}）の言葉によると、「息子が車で迎えに来て、あいさつもなしに出て行った」とのこと。したがって、チン爺さんがチャオ老人と3度目に会ったのは、お迎えに来たチャオ老人の息子（由立平^{ユウ・リピン}）の車に乗せられて息子のマンションに出向いた時だが、そこでチン爺さんは何ともやりきれない親子と夫婦の風景を見せつけられたうえ、チャオ老人も結局死んでしまうことに……。

こんな劇的なストーリー展開（？）を観ていると、やはりこの映画はドキュメンタリー映画ではなく劇映画だと確信。つまり『胡同の理髪師』は、劇映画とドキュメンタリー映画の融合した作品……？

面白いエピソードや、「チン爺さん語録」がいっぱい

この映画は、北京の胡同^{フートン}をめぐる再開発や老人問題について大上段から問題提起をしたものではなく、数人の登場人物を絡ませながら、あくまでチン爺さんの日常生活を淡々と描くもの。什刹海公園周辺^{シェンチャーハイ}の美しい風景と胡同^{フートン}のまちなみが魅力いっぱいだが、それ以上に面白いのが、中国映画には珍しく（？）軽妙なユーモアに満ちあふれ、いい味の皮肉っぽいスパイスが効いていること。

例えば、映画冒頭にはチン爺さんが長年使っている骨董モノのゼンマイ時計にまつわる面白いエピソードが紹介される。今ドキ、どんな時計屋だってこんな古い時計の修理を依頼されたら迷惑で、新品を買った方が安くて便利に決まっているが、チン爺さんにとってはコトはそれほど簡単ではない……？ また解体予定の建物に市の役人が“拆”と書くべきところを“折”と書いていることに対して、「ちゃんと書け。いい加減な仕事をするな」と抗議（？）するシーンも面白い。さらに、90歳を超えたチン爺さんに対してこれからさらに20年も使える身分証を交付するエピソードや、頭の体操のために毎日午後2時間ほどやっているマージャンに集まる老人たちの会話も面

白い。その他、「毛沢東語録」ならぬ「チン爺さん語録」には、①「有名人も金持ちも、人生は一度きり」、②「動けるなら散歩して……テレビばかり見ているとバカになる」、③「暇ならマージャンでも マージャンは頭を使う 脳の体操になるんだ」、④「人間、死ぬ時も、こざっぱりきれいに逝かないと」等、味わい深い人生訓がいっぱい……。

2世、3世たちは……？

この映画を観ていると、北京の胡同における2世、3世をめぐる親子関係の問題点が否応なく浮かびあがってくる。ミー老人は孤独死だったが、チャオ老人はあれほど嫌がっていた息子夫婦のマンションでのご臨終。このチャオ老人と息子夫婦との関係は最悪だが、次々と解体されていく胡同をめぐる親子関係では、立退料の問題を含めて

し、今しか撮影できない庶民の生活を映し取った、涙と笑いそしてちょっぴり皮

肉の効いた感動作。テーマの第一は老人問題 同世代の友が減って

きたのは当然だが、出張死。一方、近代的マンションに赴くと寝たきり老人だったミーさんは既に孤独

死。一方、近代的マンションに「ちゃん」と書け。いいかげんな仕事をすると抗議しただけで現実を受け入

れたが、実はこれは大問題。オリンピック開催に向けて北京の街の大改造、再開発の陰にあるこんな深刻な都市問題を注視しなければ、もっとも、余り声高に叫ぶと大変な政治問題になるから、この程度が限界か？

冷凍餃子の中毒事件で食の信頼が揺らいでいるが、中国は長い歴史の国、懐の深い国そして儒教の国。こんな映画から胡同に生きる庶民の姿と温かさを

老人問題と都市問題の視点から

北京三四日ツアーの定番の一つに挙げられる北海公園から少し北に行けば、鐘楼と鼓楼がある。その西側は前海、後海、西海のある美しい什刹海公園で、この周辺は胡同巡りが観光名物。胡同とは明・清代に形成された庶民の街並みで、中国の伝統的建築四合院も多い。

この映画は、胡同で生活する九十三歳で現役の理髪師チン爺さんを主人公と



フットン
胡同の理髪師

あすから十三の第七芸術劇場ほかで公開



チャオさんも息子に引き取られたものの、ひどく待遇の挙げ句に「なるほど」胡同の老人問題は日本以上に深刻だ。弁護士として長年都市問題に取り組んできたたしの視点は、日本流にいうところの都市計画法や都市再開発法が適用されないうまま、解体・再開発されていく胡同の惨状。爺さんは解体を意味する「拆」の字が「折」と書かれていること

を感じてみては「写真は一場面。」

大阪日日新聞 2008（平成20）年3月7日

こういう実態が結構多いのでは……？

モツ料理屋“爆肚張”は3代目店主チャン老人の息子が立派に家業を継いでいるが、孫は家業を継がず、何と絵描きの修行中。これでは、建物が解体されて郊外移転になると店の継続が心配されるうえ、所詮息子の代で店が終了することは明らかなようだ。

他方、主人公チン爺さんの息子（馬景竜^{マ・ジンロン}）は既に50代で、近々孫が生まれるらしい。そうなるのであれば、チン爺さんにとっての曾孫。息子はチン爺さんが簡単に胡同^{フートン}の解体にに応じてしまったことに不満ようだが、それは持病に苦しんでいる自分がおカネにも苦しく、孫や曾孫も心配なため。そんな息子に対してチン爺さんはひょうひょうと貯めているおカネを渡すのだが、それが逆に息子の心配のタネにも。この映画には、そんな老人たちと2世、3世との世代交代の難しさがクッキリと……。

お迎えの準備は……？

チン爺さんは既に身近な老人たちの死亡報告を何十件も耳にしてきたが、直近で間近に見たミー老人やチャン老人の死はさすがにこたえた様子。また身分証明書用の写真撮影を要求されたことや、ミー老人が飼っていた黒猫を引き取ったことにより、来るべき「お迎えの日」に向けて準備をしなければならないと思ったようだ。

遺影がないためやむなく若い時の写真を使ったという話を聞いたチン爺さんは、まずは自分の遺影を今から準備しておこうと考えて、それを完成。翌朝自宅へ飛び込んできた息子は、そんな遺影を枕元に置いたまま眠っているチン爺さんを見てビックリ。私も思わず一緒にビックリしたが、これはチン爺さんには珍しく、単なる寝過ぎだったよう……。息子が来たのは曾孫の誕生を伝えるためだったが、これによって一層チン爺さんの来るべき日に対する準備に拍車がかかり、録音テープを前に「500字にまとめなさい」と言われた経歴を語り始めたが……。まあ、何でも事務的にテキパキと進まないのが老人の特徴だが、こんなチン爺さんの姿を観ていると、ユーモアを含みながらも、どこかうら悲しい気持ちに。

さて、私の次の北京旅行まで、チン爺さんの胡同^{フートン}は存在しているだろうか……。また、チン爺さんは元気で理髪業を続けているだろうか……？

2008(平成20)年2月11日記